

“装蹄師の卵たち”への 講義を終えて

平成26年度軽種馬経営高度化指導研修(軽種馬経営技術指導者養成・技術普及)事業の一環として、平成27年6月30日、宇都宮の装蹄教育センターを訪ね、日本装蹄協会の行う1年間の装蹄師認定講習会の受講生12名を対象に、講義してきました。彼らは、毎年7月、日高地区を中心とした北海道実習を行っているので、来道前に生産地の肢蹄管理の実態を理解させておくことを目的に、昨年に引き続き実施されました。今回は、その概要を紹介いたします。

【講演内容】

座学：「アシや蹄を学ぶ」

最初に装蹄の目的、前肢と後肢の役割、JRAの競走蹄鉄、蹄の成長と生長などを説明し、次いで子馬の肢軸異常について、X脚のGrade 1～3(軽度～重度)を例に、常歩での歩様検査の着眼点を説明しました。

さらにX脚やO脚、球節内反などの各種肢軸異常について矯正方法の基本的な考え方を説明しました。たとえば自然に治癒する場合と自然には治らない症例の見極めが大切ですが、それには症状の経過観察が大事であり、自然治癒が望めないと判断した場合には、早めに矯正用シューズ、張出しプレートや充填剤を使った矯正を試みる必要性を理解させることに努めました。特に先天性の異常であれば3～4ヵ月齢までに治しておくことが望ましく、初期段階のうちに適切な対処をすれば、その多くが良化することを、実例を用いて紹介しました。

次に、模式図を使って浅屈腱と深屈腱の主な働き説明し、浅屈腱拘縮によって起こる突球や、深屈腱拘縮が招くClub Footについて、Grade 1～4の判定方法を説明した後、症例を用いて、運動制限の必要性や、薬物療法、蹄充填剤の応用法などを解説しました。また、Club Footの後遺症として不同蹄となった場合の馬の価値の低下や競走馬としてのリスクについての理解も促し、狭窄蹄を伴う症例では、矯正用Hinge Spring Shoeの効果も紹介しました。さらに、これらの処置に無反応な症例や、処置が遅れて重症化した場合の深屈腱支持靭帯の切断例についても、その治癒経過を示しました。

また、繁殖牝馬の蹄のトラブルが胎児や生後の子馬の成長に及ぼす悪影響等を説明し、繁殖牝馬の変形蹄防止に役立つ4 Point Trimの方法についても理解を図りました。

座学：「肢蹄矯正や保護材料あれこれ」

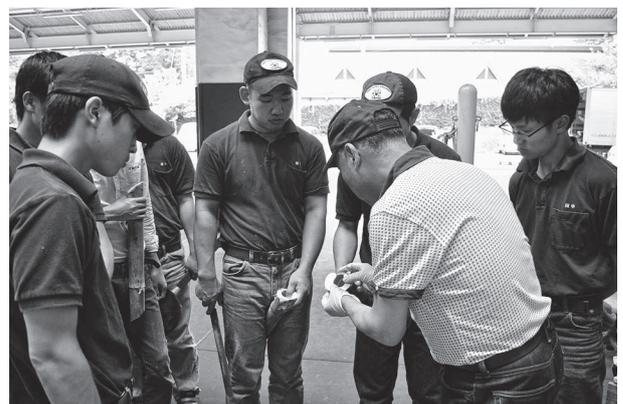
矯正や保護の材料として、レースカーのボンネットやアタッシュケースに用いるCarbon材や、防弾チョッキや防火ズキン等の素材として開発されたKevlarを綾織りした布(米国：Cobra sox)の耐引張、耐摩耗、耐衝撃性等の高強度特性を利用した肢軸矯正法や蹄の保護法その他、コイル状のHorse Slipsや、型にアドヒヤを充填するQuix Shoeの接着方法等についても紹介しました。

【実習内容】

持参したヴェテック社製のアドヒヤ、スーパーファースト、エクイバックCS、ソールガードおよびエクイロックス充填剤によるCarbon Kevlar綾織り、Kevlar平織り、張出しプレートを使った蹄保護法や各種矯正法について、輪切りにした孟宗竹を蹄に見立て、それぞれの用途に応じた接着法を紹介した後、講習生にもそれら素材を実際に使った実習に挑戦してもらいました。

【総評】

今回で3年目となる本講義の受講生は、毎年4月に入講して3ヵ月足らずの段階で、一般的な装蹄に関する基礎知識や技術を習い始めたばかりの“装蹄師の卵たち”です。また今回は生産地出身の受講生はいなかったことから、成馬に接した経験はあっても、生産地での子馬や繁殖牝馬の削蹄やフットケアは全くの未経験ということになります。そこで、講演に先立ち、「講義の途中、いつでも質問を……」と言っておいたところ、講義や実習の随所で、X脚やClub Footの発症率、狭窄蹄矯正用のHinge Spring Shoeの装着時期、ロックンロール蹄鉄の特性など、予想外に多くの質問が寄せられました。それは、彼らが生産地の護蹄に大いに興味を持ってくれた証として、大変心強く感じたものです。すでに彼らは、北海道実習はもちろん、所定のカリキュラムを修得し、この3月に社会へと巣立ちましたが、3名が北海道での就職を選んだと聞いています。彼らの活躍を期待したいところです。



講習風景